



お取引様各位

2021年2月26日
ユアサ木材株式会社

平素は大変お世話になり、ありがとうございます。
各地駐在員、エージェントから入りました地域別産地情報を連絡させていただきます。

No. 216

マレーシア

1) 木材状況

中国春節も終わり、稼働を止めていた工場も動き出したが、原料不足により低調な稼働から、まだ勢いが感じられない。例年では、何故か春節明けには、雨期が終わると言われているが（中国系の方々が一斉にお寺で祈願するから雨期が明けなのだ、等と真剣な眼で言う方が居るが。。。）、現時点で雨期明けによる原料供給の好転の朗報は聞かれない（今年は中国系の方々がコロナでお寺詣りに出向かなかつたからだ、と言う人が居るとか居ないとか。。。）。

伐採現場も今は昔。雨が酷かろうが、道がぬかろうが、お金の為ならオーバータイムも辞さない、とチェーンソーを持って入山するギラギラしたティンバーマンの存在は既に過去の話だ。ましてやコロナ禍に有っては、伐採現場にも制限が掛かり、人が満足に入れないとも聞く。然るに、天候が良くなってもそう容易には材が出て来る構造にはなっていないと考えられ、残念ながら暫くは需給バランスに変化は無いと言える。

さて、現地工場の状況であるが、原木不足を理由に新規引き合いにも反応は悪い。また、マーケティング担当のやる気が無いのか、何となく「コロナだし」と言わんばかりに受注にも力が入らない。サバ州の工場では、米国からの4'x8' 3ply合板の引き合いは強いようであるが、契約残の消化が進まない事もあり、更にはコロナで疲れが出ているのか、積極的にオーダーを取りに行く気力も失せている感じにも見える。インドネシアで受注出来ない米国向けバイヤーが突つつくも、何も反応しないコンサバな連中に対してヤキモキしている様だ。

弊社も、現に、サラワクのとある製材工場からは、少量であるにも関わらず、原木価格の高騰と入手不安を理由にオファーを断られ、イライラ感を募らせているものの怒りのはけ口も見つからない。

2) マレーシア一般状況：

全国的な活動制限令(MCO)から条件付き活動制限令(CMCO)へ移行となり、人々の生活にも少し明るい兆し

が見えてきた。元々英国領であったこともあり、マレーシア人は、サッカーを観戦、プレーすることが好きな人が多い。日本でもＪリーグが開幕となったが、マレーシアでもプロサッカーリーグが開幕することとなる。

マレーシアのサッカーについて、補足をするが、マレー系、中華系と様々な民族が交わる他民族国家であるが、サッカーに対する姿勢が民族によって違いがある。中華系の人たちは、中国本土の人にも共通するが、イングランドのプレミアリーグファンが多い。そのため、自国のプロリーグにほとんど興味がない。欧州のトップレベルの試合を見ている為、アジアでは、中堅クラスのサッカーのレベルでは物足りないようだ。そのため、マレーシアのプロリーグの観戦者は、ほぼマレー系の人たちだけで盛り上がっているという背景がある。

少し話はそれだが、人々の娯楽の一つであるマレーシアサッカーリーグが3月5日より開催される予定である。

マレーシアでは、ＪリーグではＪ１にあたるリーグ戦は“スーパーリーグ” Ｊ２にあたるのは“プレミアリーグ”と名付けられている。プレミアの方が上位と感じるのは私だけであろうか。

2021年スーパーリーグに参加するのは、下記12チームである。

- ・ ジョホール・ダルル・タクジム
- ・ ケダ
- ・ トレンガヌ
- ・ ペラ
- ・ セランゴール
- ・ U i T M
- ・ パハン
- ・ ムラカ・ユナイテッド
- ・ ペナン
- ・ クアラルンプール F A
- ・ ペタリンジャヤシティ
- ・ サバ

注目は目下リーグ7連覇中のジョホール・ダルル・タクジム（JDT）であり、アジアチャンピオンズリーグ（ACL）の常連であり、Ｊリーグチームと対戦する際は、日本でも試合をしている。

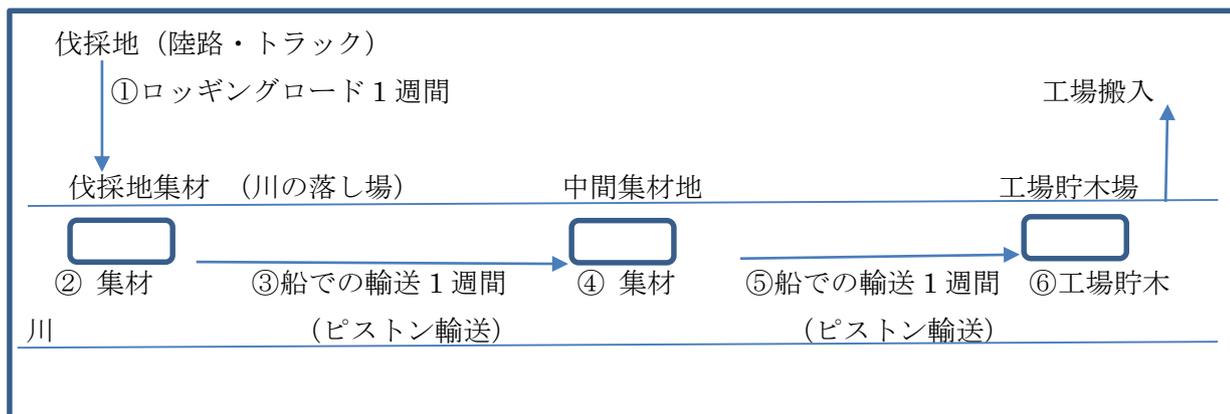
ボルネオ島唯一のスーパーリーグ所属チームであるサバFC（2021年より名称変更）にも期待したい。過去に優勝もしたことのある古豪である。

プレミアリーグ（2部リーグ）になるが、元日本代表選手である本山雅志選手が2021年シーズンよりクランタン・ユナイテッドに入団した。日本人選手はマレーシアリーグに数名参加しているが、元日本代表のマレーシアリーグでのプレーは史上初となる。

インドネシア。

今年の雨季はひどく、原木運搬に予想以上に苦戦している。

奥地化した伐採地から川へのロッキングロード①の整備に時間が掛かり、川の水位も上がりバージ（原木運搬ハシケ）を順調にピストン送り③が出来ず、中間集材場所④にも材が集まらない。中間集材場所④には、その先へのピストン輸送用⑤の空バージが大量に待機している状況。そもそも伐採地原木落とし場から中間集材場所まで一週間の運搬③、中間集材場所から合板工場まで更に1週間の川下り④が必要な距離が一般的である。中間集材場所④に如何に原木が集められているかが、ポイントとなる。その中間集材場所④に原木が無いとなれば、最低1週間は原木が下りて来ないという事になる。



さて、主要産地であるバンジャルマシム地区の工場の多くは、原木が入ってこない為に2月前半は生産停止状態が続き、契約残の生産が全く進まず。日本国内では直需アイテムの欠品が迫り、工場へ生産を催促しても『原木が入ってこない』の一点張りで、いかようにも出来ずヤキモキしている状態が続く。

契約残の消化が進まない工場は、新たな契約を拒む状態が続き、2月は新規契約できるのが3工場に限られた。そこに注文が殺到したのは言うまでもない。既に5月生産として新規契約するが、実際納期面には不安要素が多い。

現地C&F価格は2月も平均して6%値上げ。特に2.4mm厚の上昇が著しく、指標となる大手の月初オファーは1000ドル手前まで上昇した。背に腹は代えられず、オーダーを入れるも、希望数量の半分しか契約出来ず時間切れの来月オファー待ちとなってしまった。既に2.4mmは4桁前の成約が終わり、果たして3月に口を開くシッパーは桁を上げて来るのか？戦々恐々としている。

雨期も開けず、未だに原木の運搬がままならない環境であり、直ぐには環境が改善しないと見るも、更には4月13日から約1ヶ月のイスラム断食が始まる。通例この時期にも生産に支障が出ると言われており、契約残の船積み予定を見ても、直ぐには生産の遅れが解消する様には見えない。全世界的な木材バブルに発展しつつある環境であるが、落ち着きを取り戻す要因が現状見当たらず、一体どこまで価格が高騰して行くのか？3月オファー（成約？）の薄物合板の価格が桁を飛び越えて行くのか？は後の「歴史のIF」の場面なのかもしれない。

中国

旧正月が明け、新たな契約を行うも価格帯に特に動きは無く、高止まっている状態で、しばらく価格の動きはないと予測される。一方納期面だが、各工場が掲げる契約残にも底が見えてきている。今年の旧正月期においては、指定納期通りに、ほぼ順調に生産が実行されており、これら契約残が無くなってきた辺りで、3月以降の次なる価格交渉に現地側が応じかどうかがカギを握りそうである。

中国における高鉄（中国版新幹線）路線網の拡大は、1997年以降、主要都市間の建設から始まった。その後、各地域を結ぶ高鉄は、高架高速化が推進され、2004年以降では時速200キロ営業も開始された。今では、多くの主要都市間の高鉄は、最高速度・時速300キロが通常となっている。

主要都市間の営業が次々に開始され、次に主要都市から地方都市を結ぶ路線網の建設が始まった。そして今となっては、その主要都市から地方都市への建設も全国的に網羅されつつあり、最後の建設計画となる地方都市間を結ぶ路線網が構築される段階となってきた。

もちろん地方都市間の場合、乗車見込みの需要が主要都市からのそれと比べた場合、大きく落ち込む事が予測されるために、地方都市の中でも、都市階級の多い所からの建設が優先されている。

ここで少し脱線して（鉄道について述べていただけに脱線はいただけないのだが）、中国の都市の階級について触れさせて頂く。

簡単に説明すると、都市の人口云々のみで階級が決定されていくわけでは無く、その都市の生活レベル、商業施設レベル、産業（企業）レベル、今後の将来性等を総合した都市階級制度となっており、毎年その都市の魅力度ランキングが上下するという非常に目に見えた分かりやすい階級制度となっているのである。もちろん、この階級制度は、メディアや政治家たちが巧みに操作している可能性も高いので、一概にそれだけでその都市の魅力を知ることができるわけではないが、広い中国を知る上では、民間人レベルの認知対象として、分かりやすく活用されているようである。

この都市階級レベル（段階）は5段階に振り分けられている。一般的に、5段階の都市区分を1線都市～5線都市に振り分けられている。

1線都市というのは、いわゆる大都市である、北京、上海、広州、深圳となっている。この4都市が1線都市から外される事はまず無いと言って良い。現在はこの4都市に加えて、新1線都市という新たな区分も誕生しており、例えば、重慶や南京、瀋陽等々、15都市に及んでいる。この辺の都市名であれば、中国通でなくとも多くの方が理解できるだろう。ちなみに武漢も、この新1線都市に入っている。

2線都市ともなれば、ちょっと「中国知識」が怪しくなってくる。大連、哈爾濱（ハルピン）、煙台、廈門（アモイ）くらいが私のレベルで認知出来るギリギリラインだろうか？ その他の都市も含めて、合計で30都市が2線都市に含まれる。

3線都市までくると、我々が慣れ親しんでいる中国の芯材用 LVL や間柱 LVL、あるいは梱包資材の積み出し港として名の知れる連雲港が登場してくる。連雲港で3線都市かと思うほど、この都市はデカイ規模なので、中国の懐の深さを物語っているといえよう。この3線都市は、合計で70都市存在している。さらに4線都市（90都市）、5線都市（128都市）と続いていくわけである。

話は高鉄の話に戻るが、現在における営業路線拡大計画は、地方間を結ぶ計画と建設が中心に進められている段階にきている。また、地方間とはいっても、需要が見込まれるところが建設の優先権を得る為、内陸部における地方都市間輸送よりは、沿岸部の2線都市から3線都市を結ぶ計画の方が先行している。

我々木材業界の人間として、認識の近いところでいえば、上海から連雲港迄の沿線が最近になり新規営業を開始した。そして、上海⇄徐州（当初から存在している主要路線）と上海⇄連雲港の二つの南北のルートが完成した今、次に着工を進めているのが、東西の徐州⇄連雲港線なのである（これがいわゆる地方都市間の営業網拡大計画の一端である）。この徐州から連雲港の間に存在しているのが、我々がよく通り慣れている「木材ラストベルト」と呼んで過言ではない木材のシルクロードとなっている。この路線が完成すれば、いよいよ移動がさらに楽になり、計画もスムーズになる。

現在でも十分、便利になったものだと感じてはいるのだが、さらに利便性を上げるべく、高速化建設が進む中国のインフラ整備には目を見張ってしまう。これまで、中国の生産工場まで行くのに、朝早く日本を出発し、工場近くの都市までようやく辿り着き、1泊する。そして、翌朝から車で工場まで移動し、午後から工場に入るといった流れであった。出発日から起算すれば仕事開始までおよそ1日半を要していたわけである。

しかし今となっては、順調に予定通り乗り継いでさえ行ければ、午前中に日本を出発し、その日の夕方頃には、工場に到着できてしまうのである。当初、国際線で到着した大都市に一泊して、少しなりとも旨い物でも食べて、翌日からの出張に向け英気を養おうというルーティンワークを、多くの誰もが持っていたはずである。しかし、時代の流れとともに、スピード化が思った以上に早く進行してしまったがために、少しなりとも大都市で寛げる時間さえも無くなってしまっている。

今後のビジネスライクなモノトーンの出張世界が、便利さという流れとともに、自分の目の前にやってきているこの状況に何だか心細さや寂しさを感じてしまう。

ベトナム

旧正月が明け、各工場において多少の差はあるものの、工員たちもほぼ職場復帰してきており、遅れた分の契約残解消に向けて、フル稼働を行っている工場が殆どとなっている。

現状、対面での直接交渉が出来ない中で、価格交渉においては、やや現地側優勢の状況であった。今後は、契約残の消化が進み、ある程度新規契約数量が少なくなってきつつある事で、少し踏み込んだ価格交渉が出来る事を期待していたのだが、旧正月前の高い価格帯にて契約が実行され、しばらくは、高止まりの状

況が継続しそうである。

3月以降のベトナム側の出方次第であるが、コンテナ問題の緩和と現地契約数量の減少が続けば、価格帯を下げる交渉は実現できるだろう。しかしながら、アメリカ向けの契約と韓国向けの契約数量が減ってきていない現状下においては、しばらく強気姿勢が継続するだろうと思われる。

ベトナム訪問経験がある人であれば、体験した人もいだろう床屋の話。ベトナムの床屋は、一般的には日本のそれと変わらない床屋（美容室）が町の各所で多く見られるが、やはり観光目的（出張中の休みも含めて）のひとつとして、一度は経験しておきたいのが、路上理髪店である。

歩行者専用道路で所狭しと運営する床屋も有れば、公園の周りに何件か並ぶ路上床屋群もある。路上床屋店は、見過ごしてしまう可能性もある位、分かり難い（特に外国人は）。どれも似たような価格帯でサービス提供しているが、一般的には路上床屋の場合、ベトナム人であれば日本円でおよそ200円も出せばカットできる。しかし、我々外国人の場合、やや高めに設定される事だけは念頭に入れておきたい。とは言っても、300円～400円で間違いなくカットできる。

ちなみに路上床屋ではカットだけであり、洗髪も、髭剃りも無い。路上に置かれた古びた椅子に座り、たまにグラつくが、気にしてはいけない。座った椅子の目の前には、もはや反射力を失った薄汚い鏡が置かれている。カットする人間により、もちろん技術力の差があるのだろうが、基本的には横一線だろう。仕上がりに見本となる写真を見せて、即座に“分かった”とばかりにうなずき、速攻切り始める。ハサミの刃は鈍化が進んでいるのか錆びているのか、よく引っ掛かり、痛い瞬間がままある。そして、親父の手は気持ち汚れている（これも気にしてはいけない）。着衣に散髪した髪が付着しないように、薄い布をまとうが、これがやや臭い（きっと洗っていない）。

そんな楽しい経験を満喫しながら、カットは続いていく。少し見にくく映る、目の前の鏡を頼りに、手さばきで“もう少し短く”とか、“ここを残して欲しい”という細かな要望も当然受けてはくれる。しかし理想形には程遠い仕上がりとなる。おそらく、彼らの中では、カットの完成形が決まっており、その仕上がりを鏡で見ると、大概よくあるベトナムカットにて完了する。

当社スタッフの路上床屋カット後の写真を載せたいのだが、プライバシーの関係も有るので、ここでは省かせて頂く。側面が異様に涼しくなるので、ちょっとだけ完成した後は、恥ずかしい気持ちも芽生えるのだが、ここベトナムでは、何となくこれに同化できてしまうので、長く違和感は生まれない。

問題は帰国後だ。帰国すると結局多くの人が、今一度日本の床屋（美容院含めて）に行き、トリミングを施してしまう（やはり日本に戻れば違和感を持ってしまうのだろう）。私の場合、ベトナムからカットした帰国後、即座に日本の床屋に向かった。そこで言われた事は、“自分で切ったのですか？”である。それほどまでにハサミの質が悪いのか？床屋の腕が悪かったのか、レベルの低い仕上がりだったようである（よく普通の面下げて帰って来れたなど、ふと思ってしまった）。

ベトナムの床屋の全てが、このスタイルでは無い為に、日本の床屋に対しては、ベトナムで切った、とい

う事は言わないでおいた。ベトナムで安く仕上げようと、経験も含めて路上床屋に行き、ちょっぴり浮いた気持ちになったのも束の間、結局、日本で二次加工を施す事に至っている辺りで、無駄な作業であったと自戒してしまった。

しかし、経験値としては、普段なかなか出来ない事でもあり、現場を目の当たりにして、路上床屋を体験してみたいと思う人もきっと少ないだろうから、初めてベトナムに行く人に対しては、自信の体験談を物語り、やってみるべく勧めるようにはしている。

ベトナムでの路上カットは、ラグビーワールドカップ日本代表の松島幸太朗のような髪型になるのだが、髪型というものは、やはり持っている当人の顔つきによって、似合う似合わないのバランス問題がどうしても生じてしまうようである。

当社の勇気ある社員が、その髪型のまま事務所に現れた時には、社内が爆笑の渦に包まれ、一時の平和が訪れた事を今でも鮮明に記憶している。

ロシア関係

AA) トピックス：

1) 「レールモントフ」：

最近のロシア産地情報では、政治ネタのような堅い内容のトピックスを取り上げることが多かったのですが、この項は、少しソフトな一般にあまり知られていないがロシア文学では重要な作家(詩人)をご紹介します。

帝政ロシア時代の upper class 階級ではフランス語を日常生活で使っていたため、当時書かれた小説の中にはフランス語がそのまま使われている作品もある。トルストイの「戦争と平和」でも作中の貴族の会話はフランス語で書かれている。

ロシア語の口語を散文に採り入れ、新しい国民文学を確立した「大尉の娘」や「エフゲニー・オネーギン」、「スペードの女王」など数々の名作を世に送り出したアレクサンドル・プーシキンは、ロシア近代文学の嚆矢とされ、日本でもよく知られている。そのプーシキンが決闘によって悲劇的な最期を遂げたとき、「詩人の死」と題する憤りの詩を書いてプーシキン殺害の扇動者に烙印を押した若い詩人がいた。それがニコライ時代のもう一人の偉大な詩人ミハイル・レールモントフである。この詩のためにレールモントフはカフカス(コーカサス)に流された。彼もまた決闘で殺される。彼の力強い才能はその最盛期に摘み取られた。その創造的深みと芸術的リリズムによって、レールモントフの自由を求める狂乱の詩は広く知られるに至った。

レールモントフの生きた時代は、デカブリスト(農奴制廃止などを目指した革命家のこと)潰滅後の暗い反動期であった。社会的高揚の時代は遙か後方にあり、彼の時代を特徴づけたものは流刑、懲役、兵役、そして自由の抑圧だった。彼の詩には、その時代を生きた青年の苛立たしさと憤りが鋭く反映している。プーシキンが社会現象や人間心理を客観的に表現したのに対して、レールモントフはそれらを主観的に表現

した。この対照はふたりによって創造された「余計者」の典型にもはっきり現われている。

この余計者 (лишний человек) というワードはロシア文学においては重要だ。進歩的な思想を身につけ優れた資質をもちながら、それを社会のために生かせず、決闘や恋愛遊戯などの馬鹿げたことに精力を浪費したり、無気力になって屋敷に引き籠ったりする類の人物である。ツルゲーネフやドストエフスキーにもこの手の人物が登場している。厳密には異なるが、日本では夏目漱石の小説にしばしば登場する「高等遊民」に近いイメージだろうか。

レールモントフの叙情詩の底流にあるのは、反逆の精神、行動への渴望、自由への憧れ、祖国愛、人間愛といえよう。満たされない自由の渴望が、ときに苛立たしさを伴って現われる。彼は現実の矛盾からの出口を求める。それは嵐の渴望である。彼にとって「闘争のない日々を過ごすとき、人生はすこぶる退屈」だった。彼は自由に到達する道を知らない。だから人間生活の自由の概念が、彼の内心では半ば空想的、象徴的な形象をとる。斜に構えたようなそんな彼の生き方に私は憧れていた。若くエネルギーに溢れる肉体と精神は闘いを目指す特権を持つと信じ込んでいた私は、それに強く共感していた。表層的な概念しか理解できなかったのだが、それはとてもスタイリッシュだった……。

一般的に最も知られているレールモントフの小説は、「現代の英雄」だろう。最近、新訳版文庫も刊行されたロングセラーである。この散文小説は5つの短編から成っている。そのすべてが、ペチョーリンというひとりの人物を主人公としているが、それぞれの短編の内容はまったく独立したエピソードである。ペチョーリンは偽悪家で、沈滞した現実の社会に妥協できない。偽善を憎む彼の行為は世間的常識の逆を進み、他人の見せたがらないエゴイズムを堂々と人前にさらけ出す。ペチョーリンは明らかに作者の分身的性格の持ち主である。そういえば偽悪家という存在にも私は若い頃憧れていた。

この小説を読んだとき、ペチョーリンは、プーシキンの小説「エフゲニー・オネーギン」の主人公オネーギンの生まれ変わりだと気付いた。つまり「余計者」のタイプに属する。オネーギンが1820年代のヒーローとすれば、ペチョーリンは1830年代のロシア社会の病弊を



「ミハイル・レールモント

代表するヒーローである。貴族でありインテリ層に属し、教養のある人間なのだが、理性と感情が不調和で精神のバランスが取りづらい。勇気と才能が磨滅していく。まさに余計者。

作品の随所にみられるカフカスの自然描写もさることながら、登場人物の心理分析は、ロシア文学において前例をみないほど鮮明である。文体も無駄がない。チャーホフは、レールモントフの文体をロシア作家の中でも簡潔明瞭なものと高く評価していた。旧友との間で決闘となり命を落とす。享年26。

2) 「遙か彼方な領土」:

去る2月7日は「北方領土の日」(最初に国境の取り決めが行われた日口和親条約が結ばれた日)だった。新型コロナウイルスのパンデミックによって、世界各国が内向きの政策をとらざるを得ないことで日口間懸案の北方領土問題への関心が薄れてきた現状を反映し、今年の式典は以前に比べ盛り上がりには欠く印象を受けた。

7月の産地情報で、憲法改正により国家の領土割譲にかかわる制約が強化されたことを述べた（隣国との国境策定は例外ということだが）。ますます遙か遠く領土返還であるが、このほど北方領土を事実上管轄するロシア極東サハリン州政府は、国後島・古釜布（ロシア名ユジノ・クリスク）に廃棄物処理施設の建設計画を進めていることを明らかにした。先月には設計業者を選定するための入札が行われ、ロシアの企業が落札したという。サハリン州政府によると、家庭ゴミなど年間約13,800トンの処理能力を持つ施設を建設する計画で、来年の稼働開始を目指している。入札は日本企業にも開放されていたが、参加社はなかったという。この事業は、日ロ両国による共同経済活動での実現が有望視されていた。共同経済活動は、両国の信頼醸成の一環として、ゴミ処理や観光など5分野で検討が進められてきたが、本格実施には至っていない。

この共同経済活動が幻になるのではとの懸念以外に、国後島で看過できない出来事が起こった。北方領土の日に合わせたのだろうか、この直前にロシア軍による国後島沿岸での射撃訓練。これ以上、領土問題に口出しするなという日本へのサインなのか？ 1992年開始のビザなし交流は例年7～9月に実施され、そのために2月には準備が始まるのだが、今年はまだその動きはない。去年はコロナ禍で全面中止したので、今年もそれに倣うということか。いずれにしても、ロシアとしてはこれを既成事実化し、交流そのものを打ち切るつもりではないかと穿った見方をしてしまう。

3) 「ロシアのオリパラ参加」:

国際オリンピック委員会（IOC）は、組織的なドーピング問題で処分を受けたロシアの選手が個人資格により今夏の東京五輪・パラリンピックに出場する際の規定を発表した。選手らはロシア・オリンピック委員会（ROC）代表の扱いとなる。所属を表示する際は頭文字の「ROC」。東京五輪でロシア勢が着用するユニホームには国旗ではなくROCのエンブレムを着け、「ロシア」の文字が消せない場合は「中立選手」と併記する必要がある。

ROCで想起するのは台湾（Republic of China）だが、同国が世界的なスポーツの祭典に出場する際は、チャイニーズ・タイペイが使用されている。台湾は国連に加盟しておらず、国際社会では認められていないため、かような呼称になったと聞いたことがある。話が逸れた。

同じくドーピング問題による処分を受けた2018年平昌冬季五輪では、ロシア勢は個人資格のOAR（ロシアからの五輪選手= Olympic Athletes from Russia =）として出場したのだが、今回はなぜROCの呼称になったのだろうか？

少しこの問題を発展させてみる。国代表としてロシア選手が出場を拒否された事態を受け、その報復行為としてロシア軍の情報総局（GRU）が東京大会の関係各所にサイバー攻撃を行ったことは明白な事実である。2018年の平昌大会でも同様の攻撃を行っていた。今ロシアは、通常兵器のレベルがあまり高くないと評価されているため、直接的な軍事力よりもソフトパワーの悪質版ともいえるべき「シャープパワー」を使用している（中国も同様だ）。

「ハイブリッド戦争」という用語が最近注目されている。21世紀型の新しい戦争の姿。これは、政治的目

的を達成するために軍事的脅迫とそれ以外のさまざまな手段を行使するというべきもので、政治、経済、外交、プロパガンダを含む情報・心理戦、さらにテロや犯罪行為を含めてもいいだろう。フェイクニュースを用いた宣伝・情報戦や先に述べたサイバー攻撃もそれに当たる。この戦争を仕掛けているロシアの現状と、その脅威については機会を改めて述べたいと思っている。

BB) 産地現状 :

極東エゾ丸太 3.8 M 日本海側 22-30cm (CIF)	-----
極東カラ松丸太 日本海側 22-30cm (CIF)	-----
シベリア赤松丸太 日本海側 22-36cm (CIF)	-----
シベリア KD 赤松原板 日本海側 US (CIF)	US\$430 前後
シベリア KD 赤松垂木 A グレード 東京	US\$530 前後

1 月末現在の首都圏のロシア製品の在庫数量は約 23,000m³ で、先月末比で 6,500m³ 減った 2 月に入ってその数量は多少増加しているが、例年に比べると迫力は感じない。良材丸太不足が原因。さらに輸送問題も発生している。海上、及び国内輸送。コンテナ不足などで港の荷役が進まないこと、鉄道による港への貨車搬入に制限が生じている。かつてあまりみられなかった問題発生は頭の痛いところである。産地から鉄道で出荷され、積港に到着してもコンテナ積みできない状況や経由地で予定以上に長く留め置かれることが日本への入港遅れを生んでいる。日本での港頭在庫水準の低い理由がここにもある。1 月末の在庫量は、約 22,000m³ と推定される。

「中国の買い付けが旺盛なので日本向けに影響が出る」という文言は当然有効であるが、今はこれだけでなく欧州からの買い付けも増えてきている。ロシア欧州部やシベリア地区からだけでなく、極東からのエゾ松やカラ松製品が鉄道によって欧州に運ばれていく。価格も続伸している。中国の買い気が正月休み明けにさらに高まることが予想され、日本向けの供給に影響を及ぼすことは必至とみられている。中東からの引き合いも出てきたという。このような世界需給の状況が今後も継続することを反映し、産地はますます強気の価格を唱えている。在庫減少の中で商品の手当てに動く商社筋もあるときく。それが高唱え容認のサインを産地に送ることにもつながっている。

2020 年のロシア製材品の輸入量は 545,000m³ と前年比 16.8%減と 600,000m³ を切った。それ以上にショッキングなのは、針葉樹丸太の入荷量。なんと 50,000m³ を切ってしまった。主要 3 樹種の中で特に減少したのは合板用材が主体のカラ松で 61.8%減。それでも 3 樹種の中では最も多く、約 29,000m³ である。ロシア政府による丸太輸出制限の政策が次々と打ち出されていく状況を鑑みた日本市場が、ロシア産丸太の扱いを減らすのは当然の対応だと考える。ただ、寂しさは隠し得ない。

ニュージーランド関係

AA) 商況/産地現状 :

NZ ラジアタ丸太の中国向け輸出価格が 3 月積みで \$150 に乗ってきた。昨年末から続伸しており、留まることを知らない勢いである。旧正月休暇明けも価格上昇のブレーキはかからないとみる向きが主である。

新型コロナウイルス感染症拡大によって、多くの国の経済成長率が落ち込む中、中国は内需喚起が効いているのか、今年の実成長率は8%台が見込まれており、これは木材製品輸入にも追い風になっている。

2020年の中国の林産物輸入数量だが、丸太は約5,950万m³とほぼ前年並み。製材品は3,360万m³と前年から10%近く減少した。丸太の産地別では、NZが1,600万m³（前年比の8.5%減）で次いでドイツ、ロシアの順。ドイツは前年より2.4倍の1,000万m³弱。この大部分は以前にお伝えした虫害材を主とする安価な被害材である。

さて今年はどうか。昨年後半から顕著になってきたコンテナ不足問題により、欧州からの丸太入荷が滞っているという。ならばロシアはどうかといえば、国策により「丸太から製材品へ」の移行が急になっており、入荷量の増加は見込めない。昨年460万m³の入荷だった豪州材は、政治・外交問題によって中国政府が輸入を停止しており再開の見通しは立っていない。供給能力を考えるとNZ丸太に依存せざるを得ない状況なので、それが高値を呼んでいるといえよう。

さてこのまま上昇し続けるのだろうか。一定の価格レベルまで上がると、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチンなど南米からの供給が増える可能性がある。樹種はタエダパインでラジアタ同様の植林木。これら南米産丸太の存在はNZ丸太価格を抑える要因にはなるだろう。

中国において、輸入丸太価格と加工業者向けの国内販売価格に温度差があり、輸入価格の上昇に販売価格が追いついていないという。だが、中国における港頭在庫は、旧正月前後350万m³程度と例年に比べ大幅に少ないため、かような温度差はいずれ解消されるとみられている。

この対中国向け丸太価格の上昇は、対日向け価格に大きな影響を及ぼすことから、今後とも注視が必要だ。いずれにせよ、価格が強含むことだけは間違いないところである。

BB) トピックス：

1) 「議員とネクタイ」：

ニュージーランド議会は、ネクタイを着用しなかったとして先住民マオリのワイティティ議員を議場から退去させる処置をとったが、大きな反発を受け、その後ネクタイなしでの発言を認めた。同議員はネクタイを「植民地支配の輪縄」と呼んだ。輪縄とは誠に言い得て妙だ。

顔全体に「モコ (ta moko)」と呼ばれる入れ墨を施し、黒いカウボーイハットをかぶった同議員は、伝統的な首飾りを着け、マオリのビジネス用の正装をしていると言い、退去させられる際、「ネクタイの問題ではない。文化的アイデンティティの問題だ」と主張した。さらに、ネクタイの着用義務を「先住民の権利の侵害」だとした上で、このような場でこそ、自分たちの文化的アイデンティティを表現しなければならないと訴えた。

これに対し、ジャシンダ・アーダーン首相は議員がネクタイをしないことに異論はないとして、「われわれ全員にとってはるかに重要な問題は他にある」と述べた。さすが多様性と寛容をモットーとする首相の言

葉である。そして、トレバー・マラード議長は10日、ワイティティ氏にネクタイなしで発言させた後、規則の変更を検討していると述べた。さすが議場で、赤ちゃんにミルクを与えながら議事運営をするだけの大らかさを持つ人物だけのことはある。

因みにマオリは、ニュージーランド人口約500万人の約15%を占めている。しかし、貧困者や被收容者の割合は不釣り合いに高く、英植民地時代から続く不公正が根底にあると大勢から批判されている。

2) ”Do Something New” :

今や無視することができないほどの影響を世界中の社会に及ぼしているソーシャル・メディア。ニュージーランド観光局はこのほど、観光地でソーシャル・メディアのインフルエンサーに感化された写真ばかりを撮らないよう、旅行者に求めるキャンペーンを開始した。キャンペーン動画では、NZがソーシャル・メディアの影響を受けている旅行者の取り締まりを進めていると、冗談交じりに紹介している。同じような構図の写真ばかりがアップされていることを受けて、「浴槽の中の後姿」や「山の頂上で腕を広げる」といった陳腐な写真ではなく、独自の発想をもってほしいと訴えた。

この動画は観光局の「Do Something New (何か新しいことをしよう)」キャンペーンの一環。同キャンペーンは、新型コロナウイルスのパンデミックによって国境を封鎖してから始まった。国内旅行を進めるいわばNZ版Go Toトラベルといえるだろう。

陳腐な写真が目立つようになってから、NZのコメディアンが「ソーシャル観察隊」として登場し、観光客がインフルエンサーのような写真を撮ることを阻止している。山の頂上で腕を広げている男性には、「こういう写真は前に見たよ」と語りかけたりしているという。そして、ラヴェンダー畑でポーズを取る人をこきおろしたり、岩の上に座っている人を「考える人」とからかっている。

因みに、「Do Something New」キャンペーンでは、旅行者に違う場所を訪ねることを推奨している。独創的な写真を撮って「#DoSomethingNewNZ」のハッシュタグでソーシャル・メディアに投稿すれば、500NZドル（約3万7000円）相当の国内旅行券が当たる抽選も行っている。

日本でもTwitterやインスタで同じような表現が目につく。人のやること、それほどこの国でも同じなのだろうか。ここでも多様性や個性が発揮されていけば豊かな世界が広がっていくと思うのだが……。

欧州関係

AA) トピックス :

1) 「五輪・パラリンピック夏季大会」:

東京大会の開催はロゴマークや競技場デザイン選定騒ぎから始まり、コロナ禍による延期・中止が取り沙汰されている。さらに前組織委員長の発言はジェンダー問題まで発展し、なんだがやるせない気持ちが市民の間で高まってきている。

話は変わり、フィンランドの北極圏の北部に位置するラップランド地方のサツラは、「地球で最も寒い町のひとつ」と自称し、摂氏マイナス 50 度に達することも珍しくない小さな町だ。その小さな町が先日、地球温暖化の影響に関心を集めるキャンペーンの一環として、2032 年夏季五輪の開催地に立候補する意向を表明したというニュースを知った。



**世界一最も空気のきれいな北極圏
のリゾートといわれるサツラ**

サツラの市長は五輪招致についての声明で、「クレイジーなアイデア」と認めており、「われわれの意図は明確。

サツラを今のままにしておきたい。冬は寒く、雪で覆われる」と説明。さらに、サツラで 2032 年夏季五輪が開催可能ということになれば、それは気温が上昇し続けたことを意味するとし、「われわれが後ずさって無作為のまま、地球温暖化に何の策も講じなければ、アイデンティティを失い、われわれの愛する町や、世界中の他の多くの町は現在知られている形では存在しなくなる」と地球温暖化の危機を訴えた。

この極寒の地が夏季大会の開催地になりうる事態は、今世紀中に訪れることはないと思うが、このジョークのような声明は、地球温暖化問題に関するひとりひとりの理解や危機意識を高め深めることには効力はある。現にこれがニュースになっていることがその事例のひとつだ。

稲作に適さないとされてきた北海道だが、今後は米の「名産地」になると言われて久しい。温暖化の原因に関していろいろと異論・反論があるようだが、それはともかく世界的に大きくクローズアップされている重要課題であることに変わりはないので、出来得ることから進めていく観点では、このジョーク的な声明はひとつのきっかけになることは間違いない。

2) 「為替相場」:

EU 市場においてコロナ渦中での経済活動の再開やワクチン接種の開始もあって、マーケットが景気回復の期待を好感していることが影響しているのか、ユーロ高の傾向が続いている。

ワクチンについては、英国がいち早く先行しており、EU ではその供給が遅れているものの、それでも日本よりは早い。この問題に少し言及する。EU では域内で生産したワクチンの輸出許可制が導入されており、状況次第では世界各国に影響を及ぼしかねない。ロシア製に目を向ける加盟国すらあるという。ワクチン争奪戦、ワクチン外交が表面化している。

この状況下において、欧州中央銀行 (ECB) が先日公表した 1 月理事会の議事要旨で、政策当局者らがユーロ上昇に改めて懸念を示す一方、このところの国債利回り上昇については楽観視していたことが明らかになった。ECB は先月の定例理事会で、新型コロナウイルスの新たな感染拡大が域内経済へのリスクになるとして大規模な量的緩和の維持を決定し、経済の下支えに向け低金利の継続を再確認していた。ユーロは 1 月理事会までの数週間に大きく変動していなかったのだが、理事会メンバーらは、ユーロ高は輸入品の価格下落と輸出競争力の低下を招く恐れがあることを理由に為替レートへの懸念を表明した。

議事要旨では、「ユーロ圏の金融情勢、ひいてはインフレ見通しに悪影響を及ぼす可能性がある為替レートの動向について、懸念の声が上がった」ほか、「十分な金融刺激策が引き続き不可欠」とされた。

どの国も自国通貨の安定には細心の注意をはらっている。自国の通貨が相対的に上昇したり下落したりすることにも気を配っている。別に現代国家だけではなく、江戸末期にも為替相場は存在した（米ドルと一分銀との交換レート）。交換比率をめぐる交渉は、勝海舟もその不公平さと厳しさを自著で嘆いている。通貨が金や銀に裏付けられていたころの交換レートには相応の根拠があったといえるが、それがなくなってからは当事国の力関係が大きな要素となっていった。

だが、今はどうか。国家で管理することは難しくなり、市場がそれに変わっている。それより仮想通貨なるものには、国家が関与しづらい。

話が脱線したが、貿易に携わる人間にとって、為替レートが激しく動く状況は望ましくない。

BB) 欧州産地状況：

首都圏の欧州製品の1月末現在の在庫量は約15,000m³程度となった。最近のデータでは約14,000m³とさらに減少している。首都圏において特に減少しているというわけではなく、全国的に在庫量は激減している。その理由は先月の産地情報でも述べたように、契約数量の減少が挙げられる。日本市場を販売先とする優先順位はますます低下している。好況続きの北米向けにツーバイ材を輸出するほうが、有益であるとの傾向が一段と強くなってきた。

先月の繰り言になってしまうが、産地の状況は変わりないどころか、むしろ日本市場にとっては厳しい局面を迎えることが一層現実化してきている。産地価格の上昇である。既に言い値で買うしかない事態となっている。今月決着したWW間柱の交渉だが、供給数量は通常よりも大幅に減少、価格は数十ユーロアップ。一方、ラミナ製品も産地からの大幅アップを飲まざるを得なかった。このラミナ製品のコストアップは、2~3か月後の集成材価格に影響を及ぼす。そして、この影響は内地挽き米松製品価格上昇を生む……。

かつて、価格がある一定のレベルを超えると、危険水域に入ったことを示すアラームが鳴り、その後は相場価格が下落するという「都市伝説」的なものがあった。でも今やそれは当たらないと考えている。世界のあちこちに競争相手が存在し、またそれらは日本市場よりも若く活気があり強力だ。意識改革の時機が到来したといえそうだ。養老孟司氏は「バカの壁」を著し、それを「人間の持つ思考の限界」だとした。業界は一丸となって、「価格の壁」を超えていかなければならない。

北米関係

AA) トピックス：

不正選挙疑惑やトランプ支持者の国会議事堂乱入とすっきりしない形で船出したバイデン新政権。さまざまな問題を抱えているが、株価、住宅価格ともに好調で最高値を更新中。前例のないコロナ禍中において、

理解し難い状況が” THE NEW NORMAL “になってきているように映る。

通常なら新築・中古住宅の販売は冬場に衰えるのだが、今シーズンは様相が異なっている。秋口に一旦衰えたものの 11 月頃からまた勢いを取り戻し、今年に入ってもその勢いは止まらない。この時期の住宅販売としては異例の好調ぶりを示している。

1 月の新設住宅は 158 万戸と前月比では 5 カ月ぶりに減少した。宅地や住宅価格の上昇で建設が抑制されている可能性があるという。ただ、建設許可件数は 188 万戸超と続伸しており、2006 年 5 月以来の高水準だ。この点からも、住宅需要は依然拡大基調が継続中とみることができよう。

コロナ禍でリモートワークが定着したことにより、大都市を離れて郊外に移り住む傾向が顕著になっている。ただ、地域によっては不均等な状況がみられている。特にニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコなどの大都市からの人口流出が多く コロナ収束後、これらの大都市で「都市機能」が上手く果たされていくかどうか疑問視する見方も多い。

アメリカでの新型コロナウイルス感染症による死亡者は遂に 50 万人を超えてしまった。世界最多。死亡者数でみると 2 番目のブラジルの 2 倍以上だ。

BB) 産地現状 :

1) 原木関係 :

2 月に北米西海岸でも降雪があり伐採が一時止まったが、その後回復し出材は順調に回復している。今のところ大手シッパーは適正在庫を保っており、当面の原木供給は問題ないという。

冬場横ばいで推移し続けている原木価格だが、製品価格の高騰で 3 月は国内の原木価格も値上げに転じる可能性が大となっている。そのため、対日向け原木価格も値上げへのプレッシャーが強くなっている。

2) 製品関係 :

天候、在庫薄など諸々の状況が重なり、北米製品価格は 2 月に入り一段と高騰。昨年 9 月記録した過去最高値をあっさりと更新している。工場によってはバラツキがあるが、地場工場の生産性は悪く、中間業者も冬場、春先に向けての在庫確保のため積極的な買い付けを進めており、これが市場を突き上げている状況だ。

在来向けもカナダの一部のシッパーは早々と第 2 四半期のオフアを出し、第 1 四半期価格の 2 割高にて取り決めた。大手シッパーも追随するものと思われ、第 2 四半期はおしなべて 2 割もの大幅な値上げを覚悟しなければならない。

生産以外の要因だが、相変わらず出荷の乱れが目立っている。コンテナや機械類、労働者不足が深刻化し、特に西海岸では混乱は際立っている。出荷の大幅な遅れはますます悪化しており、港の混乱もしばらく続くと思われる。

概況

東京 15 号地 在庫推移 :

2020 年 :

1 月 29 日現在 :	米加製品 38,173	欧州製品 50,763	ロシアその他 58,587m ³	計 147,523m ³
2 月 27 日現在 :	米加製品 30,524	欧州製品 44,336	ロシアその他 61,038m ³	計 135,898m ³
3 月 30 日現在 :	米加製品 30,417	欧州製品 35,279	ロシアその他 60,142m ³	計 125,838m ³
4 月 28 日現在 :	米加製品 30,144	欧州製品 31,729	ロシアその他 72,706m ³	計 134,579m ³
5 月 28 日現在 :	米加製品 34,220	欧州製品 33,199	ロシアその他 81,608m ³	計 149,027m ³
6 月 29 日現在 :	米加製品 34,007	欧州製品 37,880	ロシアその他 87,347m ³	計 159,234m ³
7 月 30 日現在 :	米加製品 35,074	欧州製品 42,085	ロシアその他 85,077m ³	計 162,236m ³
8 月 28 日現在 :	米加製品 31,890	欧州製品 46,932	ロシアその他 77,380m ³	計 156,202m ³
9 月 29 日現在 :	米加製品 28,773	欧州製品 42,552	ロシアその他 67,797m ³	計 139,122m ³
10 月 29 日現在 :	米加製品 24,172	欧州製品 30,417	ロシアその他 56,252m ³	計 110,841m ³
11 月 27 日現在 :	米加製品 22,574	欧州製品 24,044	ロシアその他 47,842m ³	計 94,460m ³
12 月 24 日現在 :	米加製品 20,476	欧州製品 17,836	ロシアその他 38,393m ³	計 76,707m ³

2021 年 :

1 月 28 日現在 :	米加製品 21,284	欧州製品 14,390	ロシアその他 36,390m ³	計 72,064m ³
--------------	-------------	-------------	-----------------------------	------------------------

2 月 25 日現在 :

米加製品 23,357m³ 欧州製品 13,352m³ ロシアその他 (含む中国) 37,101m³ 計 73,810m³

前月比 1,746m³ の増。米加製品 2,073m³ 増、欧州製品 1,038m³ 減、ロシアその他 711m³ の増。

住宅概況 :

2020 年 12 月の新設住宅着工数は、65,643 戸だった。前年同月比では 18 カ月連続の減少。これはリーマンショック後の 2009 年 12 月の着工数 69,298 戸も下回り 1964 年以来 56 年ぶりの低水準だ。

2020 年の通年新設住宅着工戸数は 815,340 戸で、前年比 9.9%減、89,783 戸現と 4 年連続で減少した。新型コロナウイルス感染症の影響が大きな原因で、持ち家、貸家、分譲住宅がいずれも約 10%減少の結果である。6 年ぶりの 90 万戸割れ。またこれは、2010 年の 813,126 戸に次ぐ低水準だ。

以上